経済モデルの多様性に関する比較研究緒論（報告要旨）

Comparative Research on the Diversity of Economic Models

末永 茂（一般財団法人国際貿易投資研究所）
Shigeru SUENAGA(Institute for International Trade and Investment(ITI))
青山 周平（リオ-コンサルティング）Shuhei AOYAMA(RIO Consulting)

昨年、我が国はドイツに抜かれて GDP 世界 4 位になった。前近代的な政治スタイルが今なお強力に残存していることや、周辺アジアの地政学的圧迫を感知すると、やはりこれまでの政治経済社会構造は刷新しなければならないだろう。また、オンラインの急激な普及は学術研究スタイルを変貌させてきた。それと連動して、数量的高度化・精密化が進む一方で、安易な結論や政策提言がなされる傾向が高まったような印象がある。

海外に目を転じると、ウクライナ戦争やイスラエル＝ガザ戦争、米中の覇権競合等によってこれまで想定して来た自由貿易体制の根幹が揺らぎつつある。これに対して「純」経済的分析の研究報告は、関税ゼロの「封鎖経済」を措定してコンピュータ処理される。もちろんこれはヴァーチャルな思考実験として行われるのであるが、問題は結論部分で具体的な現実政策が提言されることである。社会科学研究のシミュレーションは物理工学的なモノとは本質的に異なっている。いくらモデルの複雑化を組み立てても実態を反映できるものではないし、実態社会から遊離する現象すら生じる。

モデル論を別な視角で捉えるため、あえて経済史的なモデルを例に「経済発展段階説」を比較したい。

① リスト＝「未開➔牧畜➔農耕➔農工➔農工商」
② K.ビュッヒャー＝「家内経済➔都市経済➔国民経済」
③ ロストウ＝「伝統社会➔離陸の準備➔離陸➔成熟への前進➔大量消費社会」
④ マルクス＝「原始共産制➔古代奴隷制➔封建社会➔資本主義社会➔共産主義社会」

何れの経済発展論も単なる類型化に過ぎないが、生産力発展論という点では共通している。リスト、ビュッヒャー、ロストウは最終段階を分析者が生きている時代までを論じているが、マルクスだけは未来社会論を付加している。従って、マルクス主義は宗教的観念を伴い、大規模な社会的実験を志向することになる。

他方で、国際開発論による民主政治の実現や、独裁からの解放というテーゼも現実的ではなかった。世界市場のグローバル化は均一化を拡張し、新たな問題群を生み出している。あたかも単一品種農作物の大凶作のようである。また「共同体論」の盲点として、近親憎悪はより残酷になる傾向も強い。世界は多様であるから、近代化論や過去の植民政策論の読み返しも非常に重要である。俯瞰的視点や包括的な政策体系のない所には、必ずや武力の論理が独走する。今後どんな経済学が主流派を形成すべきなのか？　粗削りでも野心的で時代を切り開く研究スタイルを期待したい。